平成２２年度策定

大向区活性化計画書

平成23年3月

大　　向　　区

大向村づくり委員会

大向区活性化計画の策定について

京丹後市久美浜町大向地区は、北緯３５度３８分２８秒、東経１３４度５４分５秒に位置し、平成２２年１０月には世界ジオパークに認定された山陰海岸ジオパークにも指定されている風光明媚な農山漁村である。

明治１６年に編纂された大向村誌によれば、当時は７１戸で男性１５２人、女性１５７人の合わせて３０９人の集落であった。

しかし、現在に至るまでの約１３０年を経る中で、総戸数３７戸、人口は男性４９人、女性５１人の合わせて１００人にまで減少するに至った。このような現象は大向地区に限ったことではなく、長引く不況の影響を強く受け、社会基盤の整備も進まない中で、日本全国に’限界集落’などと不名誉な扱いを受ける地域が続出している。

幸い大向地区は限界集落と呼ばれるには至っていないが、海業・観光を主軸とした産業・生活基盤がぜい弱で、少子高齢化が進行しているなかで、予備軍的な状況にある。

今では物の豊かさを得たものの、人と人との絆が薄れ子供会や隣組単位の行事も少なくなり、家族や地域の人達とのコミュニケーションも少なくなってきている。

既に大向区では今日の状況を予測したかのように、昭和５６年に檀尻の区内巡行を再開し、ふるさとの夏祭りや秋祭りの餅撒きとビンゴゲーム、ふるさとの想い出づくり事業の実施など、区民や他の地域の人達との絆をより強める取り組みを積極的に推進してきた。

私達は今日の閉塞的な状況を打ち破るため、過去の取り組みに学び、出来るところから出来るようにして始めることとし、まず「絆」と相互の「コミュニケーション」を強める取組みから、自信を持って一層進めようではありませんか。

目　　次

１　　はじめに　---------- ４

２　　計画の策定にあたって　---------- ４
　ア　　計画の趣旨　---------- ４
　イ　　計画の構成と計画期間　---------- ５
　ウ　　計画の役割　---------- ５
３　　目標とする活性化計画の内容　---------- ５
　ア　　施設の整備計画　---------- ５
　イ　　生活環境の改善　---------- ６
　ウ　　区民相互の交流促進　---------- ７
　エ　　高齢化対策　---------- ８
　オ　　地域産業の活性化　---------- ９
４　　区民の創意と工夫で誇れるふるさと　---------- １０

付　　録

　アンケートの概要　---------- １１
　村づくりの構図　---------- １３

大向区活性化計画の策定に当たっては、京丹後市の地域まちづくり支援事業を活用しました。

大向区活性化計画書

～　出来ることからとりかかろう　～

1　はじめに

私たちは、誰しも健康で文化的な暮らしをしたいと願っています。

しかし、自由競争の経済社会にあって、負の影響を強く受け少しずつ人口が減り、かつて地域の中心的な産業であった機業や民宿も激減し、農業や水産業も徐々に衰退しています。

しかし、人も、金も、知恵も都市に集中している中にあって、手をこまねいてほおっていたのでは、決して大向区は良くなりません。大向区の人口が年々減少し、財政規模がぜい弱であっても、区民みんなが知恵を出し、汗を流し、他の地域と連携しながら区を守らなくてはならないのです。

８月に行った村づくりアンケートによれば、半数以上の人が恵まれた自然環境を高く評価しています。

大向区に住む全ての人々が、自然環境など資源をうまく活用し、みんな村の担い手として、金銭的な豊かさにとどまることなく、心の豊かさも含め、「住んでよかった。」「大向へ帰りたい。」と思える村づくりを目指そうではありませんか。

2　計画の策定にあたって

ア　計画の趣旨

今まで大向区だけで地域の振興計画を策定するということはありませんでした。しかし現在では、地域の活力が年々減退する中で、補助金を活用して様々な活性化対策を講じようとすれば、ほとんどの場合、地元負担金が必要になります。

そのため、限られた財源を効率的かつ効果的に活用しながら、計画的に地域の振興対策を進めることが大変重要になっています。

さらに現在大向区がかかえている課題、問題点等を整理検討し、将来を見通す中で、緊急を要するものあるいは今後５ヵ年程度を目途に取組むこと等を整理し、大向区民が共通の理解と認識に立って活動することが、重要になっています。

そのことから、今後、区民が一体となって取組む共通の活動目標となる「大向区活性化計画」～出来ることからとりかかろう～を策定することといたしました。

イ　計画の構成と計画期間

「大向区活性化計画」では、アンケート結果等に基づく現状分析と、今後５カ年程度を目途に取組む事柄について記述しました。

平成２２年４月１日から平成２８年３月３１日までを計画策定並びに実践期間とします。

ウ　計画の役割

「大向区活性化計画」は、大向区をはじめ大向村づくり委員会や、その他の団体等が取組みを進める場合の指針となるもので、この計画に基づいて毎年度の大向区予算や事業執行、大向村づくり委員会等の取組みが推進されることになります。

3　目標とする活性化計画の内容

ア　施設の整備計画

京丹後市から貸与された歩行型除雪機や、イベントに使用する資材は通称ポンプ小屋に保管されていますが、建物全体の破損がひどく修

理に修理を重ねてきた結果、これも限界になっています。
　そのことから、除雪機をはじめ災害・高潮対策資材、イベント資材等を保管する施設として、平成２３年度に「防災・コミュニティ倉庫」を新築します。

　大向区内の側溝は、大向区集会所から廣峰神社石段下までの区間が未整備で、毎年、京丹後市に対して改修工事の要望をしているものの、実現をしていません。
　この計画実践期間である平成２８年３月末までに全てが完了するよう、京丹後市に対して要望を強めます。

　最近、熊や鹿が集落内に出没し、区民の安心・安全がおびやかされる状況になっています。
　こうした状況の中で、かなり外灯の増設を望む声があることから、京丹後市の補助金を活用して、計画的に増設等を行います。

イ　生活環境の改善

　大向区は、美しい久美浜湾や日本海、そして四季を彩る山々など、自然環境に大変恵まれています。こうした環境を大向区民の日々の暮らしの中に活かしていくことが重要です。
　大向区内には展望台や自然遊歩道が整備されていますが、雑草が繁茂したり心無い人たちによって空き缶、空き瓶などが捨てられ、環境を損なっています。そのため、引き続き春季、夏季、秋季のクリーン作戦を行い、環境の美化に努めます。
　また、大向展望台は山陰海岸国立公園に指定された昭和３６年に建設されたもので、鉄製の手すりが腐食して破損し危険であること。さらに遊歩道については、蛇ヶ谷で山が崩落して通行ができなくなっていることから、京都府並びに京丹後市に対して改善対策を要求していきます。

　アンケートの中で特に多かったのが冬季の除雪対策です。特に緊急車両の通行確保やサラリーマンの出勤時の積雪は、市道が狭いため出勤に困難を極めます。現在、京丹後市から歩行型除雪機が貸与されており、オペレーターを確保しつつ、早めの出動により道路の通行確保

をします。

ウ　区民相互の交流促進

今、少子・高齢化、核家族化、過疎化などによって、地域の絆が弱くなる中で、携帯電話をはじめパソコンの普及など生活水準の高度化が進み、人と人が対面し声を出して話をするコミュニケーションがめっきり少なくなりました。　その結果、家庭や地域においても、家族同士や区民が情報交換や団らんをする時間も少なくなり、住民の生活がバラバラで、集落内でのお付合いも希薄な生活構造になってきています。

こうした状況を打開するため、大向区民一人一人が区政に参画し、お互いを尊重し、つながり、支えあう仕組みづくりを推進するため、大向村づくり委員会と連携し、比較的取組みやすいイベントを中心にした交流の促進を推進します。

具体的には、研修と区民相互の交流を目的とした「研修・交流旅行」の開催や夏季の帰省客と一緒になった「ふるさとの夏祭り」、氏神の祭礼に合わせた協賛イベントの開催、「ふるさとの想い出づくり事業」を継続して行います。

特にアンケートの中では、福祉講座やカラオケ大会の開催を求める意見もあることから、大向区集会所を活用し、区民のコミュニケーションを図る催しとして、計画的に実施します。

エ　高齢化対策

現在、大向区３７世帯のうち、６５才以上の高齢者世帯は１７世帯で４５．９％を占め、全国的な傾向を先取りした形で、世帯交代がうまくいかず、今年の小学生は７人で幼児が５人、中学・高校生は不在で、まさに少子高齢化の影響を強く受けています。そして、高齢者世帯や独居老人世帯も増加傾向にあります。

一方、近年男性女性とも急速に平均寿命が伸び、かつてとは異なり、現在では多くの方が７０才を過ぎても、バリバリの現役で活躍しておられます。そして、京丹後市大宮町常吉地域では、「ＰＰＫ 運動（ピンピンコロリ）」といって、元気で長生きし、昨日までピンピンして仕事をしていたけれど、今日コロリと逝きたい。という考え方のもとに、高齢者の生産した野菜物等を、常吉村営百貨店で販売する仕組みづくりがされています。

人はみな、地域や家庭で何かの役割を担ったり、生産活動等に携わることによって、「わしも村の担い手」として、生きがいややりがいを感じます。

大向区においても、地域の資源を最大限に活用し、米や野菜作り、海業等の分野で高齢者の知恵・技・経験を生かす仕組みづくりをしていかなければなりません。

本年度に実施したアンケートによれば、多くの区民が万が一の時に対応できる安心システムの構築を求めています。

そのことから、出来ることから対策を講じることとし、平成２２年度においては、湊地区活性化協議会と一緒になって、緊急情報キットを全戸配布し、緊急時のスムーズな対応を目指しています。

今大向区に限らず、地域社会の絆が薄れ、かつては親の介護や子の世話も、また先祖の供養等、家族が当然のこととして担ってきた事柄も、単身世帯が増える中で、新聞社のアンケート調査によれば、いざと言う時でも家族や親類に頼れないという人が４割に達し、家族の姿は大きく変化してきているといわれています。そして、私たちが生きているのは、家族の中でも孤立しがちな弧族の国だと言われています。

高齢者が高齢者を介護する老老介護は、精神的な気疲れや介護倒れなど、きれい事や美談だけでは済まされない状況があります。介護の合間につくり出した自分の時間を、近所の友達や地域の人達と井戸端会議やカラオケ、○○講座への参加などで常に交流を図り、くよくよせず前向きに過ごせる仕組みをしていくことが、求められています。

今まで、大向区では地域の課題として正面から高齢化対策を議論したこともなく、個々のデリケートな問題であって、むしろ係わる事によって煩わしさを感じる人もあり、敬老会や芝居見物の実施程度の取組みに止まっていました。今後は、高齢化対策は大向区全体の問題として、①地域の担い手としての位置づけ　②独居世帯に対する緊急対策　③孤独になりがちな高齢者の暮らしを地域で補完する仕組みづくり等を推進する必要があります。

オ　地域産業の活性化

現在の大向の主たる産業は、自給自足的な農業と久美浜湾を活用したカキ養殖、日本海での浅海漁業で、かつての機織や民宿業は激減し、わずか数戸になりました。

特にアンケートのなかで、年齢、男女を問わず多かったのが働き場の確保です。私たちが大向で生活をしていくためには、周辺に所得を確保するための働く場所が必要で、区民の定住がベースになって高齢化対策や学校など公共施設、スーパー等の買物施設等の整備が進められなければなりません。

しかし、長引く不況も重なって、自分の働く場は自分で開拓しなければならないという厳しい状況で、手をこまねいているのが現実です。

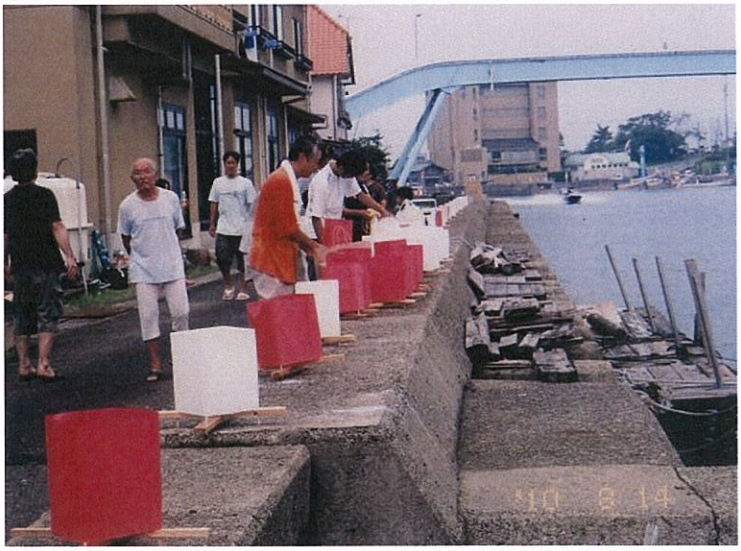
昨年、山陰海岸国立公園が世界ジオパークに認定されました。最近集落内に目立ち始めた空き家をうまく活用しながら、新しい発想のもとに海・山・里を生かした地域の活性化を図るのも方法です。
よく「よそ者、若者、ばか者」

が地域の活性化のカギを握ると言われますが、今後、地域と全く関係ないＩターンのよそ者を受け入れ、大向区の発展を図ることも大切です。

4　区民の創意と工夫で誇れるふるさと

現在の大向の人も金もパンチの効いた改善対策も見出しにくい中で、個々が思い思いのまま活動してみても、その活動成果はしれています。今大切なことは、大向区を挙げてみんながやる気になることです。

そして、大向区を今より元気にするために、大向の自然や歴史、食文化や伝統行事を見直し、自慢できる特産品や風土料理を創り出し、史跡や物語を活用したり新たなイベント企画をとおして、誇れるふるさとづくりをしようではありませんか。



付　録

アンケート結果の概要

むらづくりの構図

活動の記録　地域づくり講座

改修予定のポンプ場